

J.LEAGUE™ NEWS



© J.LEAGUE PHOTOS

2013 Jリーグヤマザキナビスコカップ優勝を成し遂げた柏の選手、スタッフが、サポーターと共に喜びを分かち合う

柏レイソルが14年ぶり2度目の優勝

2013 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝で浦和レッズに1-0の勝利

2013 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝が11月2日、4万6675人の入場者が見守る国立競技場を舞台に開催され、柏レイソルが浦和レッズに1-0の勝利。1999年以来となる、14年ぶり2度目の優勝を飾った。柏には優勝賞金1億円、Jリーグカップ(チェアマン杯)、ヤマザキナビスコカップ(スポンサー杯)、メダルが、浦和には準優勝賞金5千万円、Jリーグ楯、メダルが、それぞれ授与された。準決勝で敗れた川崎フロンターレ、横浜F・マリノスには、共に3位の賞金2千万円を授与。また、決勝のMVP賞は柏のFW工藤壮人、大会開幕時に23歳以下の選手が対象となるニューヒーロー賞は横浜FMのFW齋藤 学が受賞した。(2~3ページに関連記事)

J.LEAGUE™ TOP PARTNERS



J.LEAGUE™
100 YEAR VISION
PARTNER

J.LEAGUE™
FAIRPLAY PARTNER

LEAGUE CUP
SPONSOR

SUPER CUP
SPONSOR

J.LEAGUE™ OFFICIAL
EQUIPMENT PARTNER

J.LEAGUE™
OFFICIAL SUPPLIER

J.LEAGUE™ OFFICIAL
BROADCASTING
PARTNER

SPORTS PROMOTION
PARTNER

J.LEAGUE™ OFFICIAL
TICKETING PARTNER



2013 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ FINAL

柏にタイトルをもたらす貴重な得点を決める工藤。
右は浦和のGK山岸

2013年11月2日 13:10 キックオフ 国立競技場

浦和レッズ 0 - 1 柏レイソル

【入場者数】4万6675人 【得点経過】
【主審】扇谷 健司 45+2分 0-1 (柏)工藤 壮人
【副審】大塚 晴弘 / 山口 博司
【第4の審判員】今村 義朗



工藤(柏)が値千金の決勝点。 浦和は猛攻も及ばず

©J.LEAGUE PHOTOS

複数の主力選手が出場停止、負傷による欠場となった柏レイソルは、浦和レッズの攻撃を受けて守勢に回る時間が長かった。初シュートは前半アディショナルタイムに入ってから。だが、その直後の同2分、2本目のシュートが柏にタイトルをもたらす値千金の得点となった。右サイドからDF藤田優人が鋭いクロスボールを浦和のゴール前へ送ると、ファーサイドへ走り込んだFW工藤壮人がヘディングシュート。浦和のGK山岸龍宏の懸命なセーブも及ばず、ゴール右隅に決まった。「前哨戦」といわれた6日以前のJ1リーグ戦第30節で浦和に1-2と敗れた後、決勝について「1点が勝敗を分けると思う」と予想していた工藤。シュートはこの1本に終わるも、リーグ戦でチーム最多得点を挙げているエースストライカーの面目躍如。浦和のDF槇野智章の攻撃参加も厳しくチェックするなど、攻守両面の活躍で決勝のMVP賞に輝いた。

「チームのためにゲームプラン、規律を重んじる姿勢を一人残らず強く持っている」(ネルシーニョ監督)チームは、後半も押し寄せる浦和の攻撃を粘り強くしのぎ切り、ついに歓喜の瞬間

を迎えた。柏は2010シーズンのJ2リーグ戦優勝で昇格を果たし、翌年はいきなりJ1初優勝。そして、昨シーズンは天皇杯全日本サッカー選手権大会優勝と続き、国内三大タイトル獲得をクラブの歴史に刻むことになった。さらに、ヤマザキナビスコカップ優勝によって、南米のコパ・スダメリカーナ優勝クラブと対戦する「スルガ銀行チャンピオンシップ2014」(来年夏に日本で開催予定)への出場権も手中にした。

浦和はボールポゼッションで圧倒的に上回り、柏を押し込んだ。1点を追う立場となった後



柏の守備の要、近藤(左)が浦和の興梠の突破を阻む

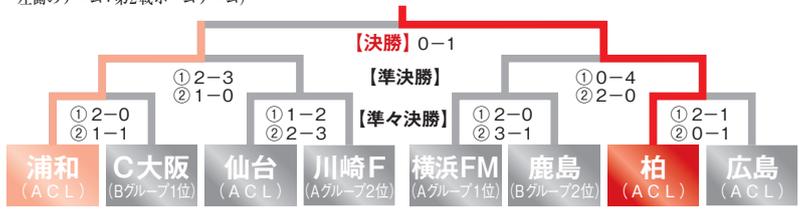


柏のレオandro ドミンゲス(左)は久々の実戦でも存在感

半は、ますます攻勢を強め、槇野のドリブル突破、セットプレーでの那須大亮のヘディングシュートなど、DF陣も積極的に加わる総攻撃。しかし、MFの柏木陽介、阿部勇樹に訪れた得点チャンスは実らず、後半アディショナルタイムにはFW興梠慎三がゴールネットを揺らすも、オフサイドの判定で得点は認められなかった。試合後の記者会見で開口一番、「非常に悔しいし、痛い敗戦」とペトロヴィッチ監督。それでも持ち前の攻撃サッカーを貫き、「浦和がどれくらいのポテンシャルを持っているかを、あらためて示すことができた」と胸を張った。

2013 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ 決勝トーナメント

※表の左側のチームをホームチーム扱いとする
(表の右側のチーム：第1戦ホームチーム / 左側のチーム：第2戦ホームチーム)



ヤマザキナビスコ株式会社の飯島社長が、柏の栗澤にヤマザキナビスコカップを授与



©J.LEAGUE PHOTOS



©J.LEAGUE PHOTOS



©J.LEAGUE PHOTOS



©J.LEAGUE PHOTOS

現在の国立競技場では最後となったヤマザキナビスコカップ決勝。浦和と柏のサポーターがスタンドを鮮やかに染めて花を添えた



©J.LEAGUE PHOTOS

決勝前に恒例のナビスコキッズバトルで子どもたちが真剣にプレー



©J.LEAGUE PHOTOS

コンコースで行われたドリブルゲームにMr.ピッチもチャレンジ



©J.LEAGUE PHOTOS

フェイスペインティングは無料でサービス



©J.LEAGUE PHOTOS

記念撮影パネルで両チームのサポーターがポーズ



©J.LEAGUE PHOTOS

タオルマフラーなど決勝記念グッズをスタジアム限定販売



©J.LEAGUE PHOTOS

東日本大震災の復興支援活動の一環として募金も実施

ネルシーニョ監督(柏)

「両チームが全てを出して戦い、非常に競い合った試合だった。柏は個人の気迫、チームの戦術において辛い時間が長かったが、崩れることなく個々が対応してくれた結果だったと思う。前半の初めから、守備からのカウンターアタックという形が今日のゲームの主な流れだった。後半、追加点のチャンスのクオリティーなど突き詰める部分はもちろんあるが、今日はこういう結果なので、とにかく私が伝えてきたことを選手たちが信じて実行してくれたことに感謝したい」



©J.LEAGUE PHOTOS

ベトロヴィッチ監督(浦和)

「決勝の舞台で負けてしまったので非常に悔しい、痛い敗戦。柏に引けを取ったゲームをしたとは思っていない。前半、われわれは攻撃的に点を取りに行く姿勢を見せた。後半はリードされていることもあり、リスクを負って攻撃的に仕掛けてチャンスも多くつくった。われわれは決勝の舞台で堂々と戦い、選手はベストを尽くしてくれた。どちらが勝ってもおかないし、負けはしたが堂々とした戦いだったので胸を張りたい。必ずまたこの舞台に立ち、サポーターに優勝を捧げたい」



©J.LEAGUE PHOTOS

大東 和美 Jリーグチェアマン

「現国立競技場での(ヤマザキナビスコカップの)ラストマッチであったが、大変見応えのある白熱した試合になった。浦和レッズが押し気味の試合展開であったが、前半のワンチャンスを決めて、さすがに柏レイソルという得点であった。難しい試合だったと思うが、しぶとく勝ち切った。浦和は残念だったが、ラストマッチにふさわしい、まさに記憶に残る素晴らしい試合になった。国立競技場は来年より改修に入るが、将来また、新しい国立競技場にも、ぜひ同じ時期に戻ってきたいと思っている」



©J.LEAGUE PHOTOS

決勝前日



©J.LEAGUE PHOTOS

公式会見で健闘を誓い合った両チームの監督とキャプテン

決勝の前日、11月1日には国立競技場で浦和、柏の公式練習、両チームの監督、キャプテンが出席した公式会見が行われた。公式会見の席上、選手たちは来年から建て替えが始まる国立競技場についても触れ、浦和のMF阿部勇樹は「小さいころから目標のスタジアムだった。このスタジアムでプレーできることもうれしい」と話し、柏のMF栗澤僚一は「ここでやれる幸せを感じながら、全力でプレーしたい」と決勝への思いを述べた。

同日夜には東京都内のホテルで前夜祭を開催。大会を特別協賛するヤマザキナビスコ株式会社の飯島茂彰 代表取締役社長が「これまでいろいろと支えていただいた方々に感謝を申し上げたい。このように大変大きな大会にさせていただいたJリーグ関連の皆さま、サッカー協会の皆さま、関係者の皆さまに厚く御礼を申し上げたい」とあいさつ。1回戦から準決勝まで、最も活躍が顕著だった23歳以下(大会開幕時)の選手が対象となるニューヒーロー賞の発表も行われた。受賞した横浜F・マリノスのFW齋藤 学は「まさか自分がこの賞をもらえるとは思ってなかったので、すごくうれしい。チームメイト、スタッフなど、関わる皆さんに感謝しなければ」と喜びを語った。



©J.LEAGUE PHOTOS

ニューヒーロー賞の齋藤にはヤマザキナビスコ製品1年分も贈呈された



©J.LEAGUE PHOTOS

前夜祭であいさつを行う飯島社長。左は大東チェアマン

Jリーグ入会審査(J2およびJ3)結果について

■ J2への入会を承認(条件付き)

カマタマーレ讃岐 (敬称略)	
法人名	株式会社カマタマーレ讃岐 代表取締役会長:大西 大介 代表取締役社長:熊野 實
設立	2008年1月16日
所在地	香川県高松市西春日町1059-13
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	高松市、丸亀市を中心とする全県
ホームスタジアム	香川県立丸亀競技場

※ただし、11月24日に開催されるJFL第34節(ホームゲーム)において、1472人以上の入場者を集め、シーズンの平均入場者数3000人以上を確定させることその他、12月1日(日)および8日(日)に開催する「2013 J2・JFL入れ替え戦」の勝者となること、J2入会の条件となる。

※承認に付帯して、経営上の指導事項が別途通知されている。

Jリーグは、11月19日に開催した理事会で、J2入会を申請していたFC町田ゼルビア、ツエーゲン金沢、カマタマーレ讃岐およびJ3入会を申請していたブラウブリッツ秋田、福島ユナイテッドFC、横浜スポーツ&カルチャークラブ、SC相模原、AC長野パルセイロ、藤枝MYFC、FC琉球に対し、Jリーグへの入会を承認した。審査結果および各クラブの概要は以下の通り。

■ J2への入会を申請したが、J3への入会を承認

FC町田ゼルビア (敬称略)	
法人名	株式会社ゼルビア 代表取締役:下川 浩之
設立	2008年3月17日
所在地	東京都町田市大蔵町550
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	町田市
ホームスタジアム	町田市立陸上競技場

ツエーゲン金沢 (敬称略)	
法人名	株式会社ツエーゲン 代表取締役社長:米沢 寛
設立	2010年12月15日
所在地	石川県金沢市示野町西2番地
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	金沢市、野々市市、かほく市、津幡町、内灘町を中心とする全県
ホームスタジアム	石川県西部緑地公園陸上競技場

J2入会を申請していたFC町田ゼルビア、ツエーゲン金沢の2クラブについては、JFLでの順位要件を充足していないため、J2への入会を承認されなかったが、条件付きでJ2ライセンスの交付を受けていたことに鑑み、J3での運営能力は十分であると判断し、J3入会を承認した。

■ J3への入会を申請し、承認

ブラウブリッツ秋田 (敬称略)	
法人名	秋田フットボールクラブ株式会社 代表取締役会長:外山 純 取締役社長:岩瀬 浩介
設立	2009年9月14日
所在地	秋田県秋田市山王3-1-7 東カンビル4F
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	秋田市、由利本荘市、にかほ市、男鹿市を中心とする全県
ホームスタジアム	秋田市八橋球技場

福島ユナイテッドFC (敬称略)	
法人名	株式会社AC福島ユナイテッド 代表取締役:鈴木 勇人
設立	2011年2月1日
所在地	福島県福島市飯坂町字筑前7-1
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	福島市を中心とする全県
ホームスタジアム	とうほう・みんなのスタジアム (あづま総合運動公園陸上競技場)

横浜スポーツ&カルチャークラブ(Y.S.C.C.) (敬称略)	
法人名	特定非営利活動法人横浜スポーツ&カルチャークラブ(Y.S.C.C.) 理事長:吉野 次郎
設立	2002年4月1日
所在地	神奈川県横浜市中区本牧埠頭3 USSインターナショナル内
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	横浜市
ホームスタジアム	ニッパツ三ツ沢球技場、三ツ沢公園陸上競技場

SC相模原 (敬称略)	
法人名	株式会社スポーツクラブ相模原 代表取締役:望月 重良
設立	2008年3月6日
所在地	神奈川県相模原市中央区中央3-7-4 高橋第2ビル1F
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	相模原市
ホームスタジアム	相模原麻溝公園競技場

AC長野パルセイロ (敬称略)	
法人名	株式会社長野パルセイロ・アスレチッククラブ 代表取締役社長:丹羽 洋介
設立	2007年1月15日
所在地	長野県長野市屋島3300
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	長野市、須坂市、中野市、飯山市、千曲市、坂城町、小布施町、高山村、山ノ内町、木島平村、野沢温泉村、信濃町、飯綱町、小川村、栄村
ホームスタジアム	佐久総合運動公園陸上競技場(2014シーズンのみ)

藤枝MYFC (敬称略)	
法人名	株式会社藤枝MYFC 代表取締役:小山 淳
設立	2009年7月15日
所在地	静岡県藤枝市高柳3-26-33
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	藤枝市、島田市、焼津市、牧之原市、吉田町、川根本町
ホームスタジアム	藤枝総合運動公園サッカー場

FC琉球 (敬称略)	
法人名	琉球フットボールクラブ株式会社 代表取締役:下地 良
設立	2013年5月23日(前運営法人より経営移管)
所在地	沖縄県那覇市山下町30-12 高良ビル1F
所属リーグ	日本フットボールリーグ(JFL)
ホームタウン	沖縄市を中心とする全県
ホームスタジアム	沖縄市陸上競技場(2014シーズンのみ)

2013 J2・JFL入れ替え戦 開催決定のお知らせ

	開催日	キックオフ	対戦カード	スタジアム
第1戦	12月1日(日)	13:00	カマタマーレ讃岐(JFL 2位) vs ガイナーレ鳥取(J2 22位)	香川県立丸亀競技場
第2戦	12月8日(日)	13:00	ガイナーレ鳥取(J2 22位) vs カマタマーレ讃岐(JFL 2位)	とりぎんバードスタジアム

※テレビ放送は決定次第、お知らせする。

参与選任の件

Jリーグは、11月19日に開催した理事会で、2013年10月15日に公益社団法人日本プロサッカーリーグ理事を退任した田中道博氏を参与に選任した。

参与 (敬称略)	
氏名	理事在任期間
田中 道博	2008年7月~13年10月(在任期間5年3カ月)

大会概要	
試合方式 および 勝敗の決定	90分間(前後半各45分)の試合を行い、勝敗が決しない場合は引き分けとする。入れ替え戦の勝者は2試合の勝利数が多いチームとする。勝利数が同じ場合は、次の順によって決定する。 ①2試合の得失点差 ②2試合におけるアウェイゴール数 ③第2戦終了時に30分間(前後半各15分)の延長戦 ※延長戦ではアウェイゴールルールは適用されない ④PK方式(各チーム5人ずつ。勝敗が決しない場合は、6人目以降は1人ずつで勝敗が決定するまで)

■注 1. カマタマーレ讃岐が11月24日に開催のJFL第34節(ホームゲーム)において、シーズン平均入場者数3000人を確定させることが前提。
2. 今年に関しては、本大会の敗者はJFLではなくJ3へ降格となる。

22歳以下の若手選手育成施策について ～J3特別参加枠「JFA/Jリーグ U-22選抜チーム (仮称)」のJ3参加決定～

Jリーグは、11月19日に開催した理事会で、2014シーズンから開始するJリーグディビジョン3(J3)への「J3特別参加枠」として、J1・J2に所属する22歳以下の選手で構成するチーム「JFA/Jリーグ U-22選抜チーム(仮称)」(以下U-22選抜チーム)がJ3に参加することを決定した。

将来有望な22歳以下の若手選手の育成は、長い間、世界を視野に入れたJリーグひいては日本サッカー界の大きな課題となってきた。これまでも幾つかの施策を実施してきたが、22歳以下の選手の試合環境をさらに整備するため、今回の新たなチャレンジを決定した。同チームの2014シーズンからの公式試合への参加によって、オリンピック出場を目指す年代の選手強化も視野に入れる。

1. 本件の決定に至る背景

22歳以下の若手選手は、公式試合の経験を積み重ねることで成長する。しかしながら、こうした育成年代のトップ選手の多くが、18歳でプロ契約した後の2～3年間、十分な出場機会を得られないという現実がある。これは世界共通の課題となっており、すでに幾つかのサッカー強豪国は、以下のように近年、大胆な施策を講じ、着実に成果を挙げ始めている。

① セカンドチームの下部リーグ参加	スペイン、ポルトガル(U-23)は2部まで可 ドイツ(U-23)は3部まで可
② サテライトリーグの実施	イングランド
③ U-21リーグを創設	イングランド ※U-19リーグは多くの国で実施
④ 若手出場の義務づけ	メキシコ：トップリーグは21歳未満選手を、延べ765分(全試合時間の半分)以上出場させる。違反すると勝点減。2部リーグはこれに加え、U-23(OA4名)で実施
⑤ 提携クラブ制度	スペイン。提携クラブの若い選手は上位リーグ出場可

この間、日本サッカー界においては、この分野における対策の進捗が遅れていた。⇒サテライトリーグは2009年を最後に休止中。休止の理由は、以下の3点に集約される。

- (a) 大会の形骸化(シーズン末に駆け込み開催)
 - (b) ユース選手が2種大会を優先 (c) 経費(選手、コーチングスタッフ)
- ⇒大学サッカーが18～22歳の選手育成に大きく貢献している。しかし、それだけでは不十分ではない。育成年代のトップ選手は、大学ではなくクラブとのプロ契約を選んでいるという実態もある。⇒初めてプロ契約を結ぼうとしている選手が、成長(試合)機会の多い海外クラブを選ぶ事態を招きかねないという危惧もある。

2. JFA/Jリーグ(JFA技術委員会 強化部会)で検討している施策案

これまで実施してきた対策を含めた若手育成施策は以下の通り。

① セカンドチームの下部リーグ参加	サテライトリーグの復活よりも、この方式が望ましい。上記(b)(c)の解消、および柔軟な登録制度が必要
② 育成型期限付移籍	今シーズン導入済み。U-23選手のウインドー外登録を容認
③ Jリーグ規約第42条第2項と補足基準の改定	2013年11月19日のJリーグ理事会にて決議
④ JFA/Jリーグ U-22選抜チームのJ3参加	2013年11月19日のJリーグ理事会にて決議

3. J3特別参加枠「JFA/Jリーグ U-22選抜チーム(仮称)」のJ3参加

- (1) チーム創設の目的
将来有望な22歳以下(U-22)選手の試合環境を整備し、成長を促す。年代別の日本代表チームの強化。
- (2) J3への参加
公益財団法人日本サッカー協会(JFA)とJリーグが、U-22選抜チームを編成。J3に特別参加枠として参加する。ホームゲームは行わず、全て対戦相手の本拠地で対戦する。
※チーム編成の詳細、大会概要については決定次第、発表する。

Jリーグ規約第42条第2項、および補足基準改定

Jリーグは、11月19日に開催した理事会で「最強のチームによる試合参加」を定めたJリーグ規約第42条の第2項、および補足基準を改定することを決定した。従来はリーグ戦、リーグカップ戦の先発メンバー11人について「当該試合直前のリーグ戦5試合の内、1試合以上先発メンバーとして出場した選手を6人以上含まなければならない」としていたが、「プロA契約選手を6人以上先発させる」に改める。また、監督やクラブスタッフが、メディアなどへの発言によって、勝つためにベストを尽くす姿勢に重大な疑義を招いた場合、制裁の対象となりうる。

若い選手、特に19～22歳の公式試合出場を促すことが改定の目的で、過密化する日程への対処ともなる。Jリーグ規約の改定は2014年1月となり、2014シーズンより適用される。

J1・J2における外国籍選手枠の変更について ～Jリーグ提携国枠(仮称)の導入を決定～

Jリーグは、11月19日に開催した理事会で、JリーグおよびJクラブのアジア向け成長戦略の推進支援を目的に、2014シーズンより、J1・J2クラブの外国籍選手枠に新たに「Jリーグ提携国枠(仮称)」を導入することを決定した。なお、1クラブ当たりの外国籍を有する選手の最大登録可能数、1試合当たりの試合エントリー可能数は変更がない。

■ 概要

Jリーグ、Jクラブのアジア向け成長戦略の推進支援を目的とする。J1、J2クラブは、外国籍選手3人(年齢などの制約のない)と、条件付き外国籍選手2人の合計5人を登録することができる。条件付き外国籍選手として、現在アマチュア選手、20歳未満のプロC契約選手、AFC(アジアサッカー連盟)加盟国の国籍を有する選手(アジア枠)が認められているが、今回新たにJリーグ提携国の国籍を有する選手(Jリーグ提携国枠(仮称))を加えることとした。(J3については大会方式決定後に発表)

■ 導入対象/シーズン

Jリーグディビジョン1(J1)、Jリーグディビジョン2(J2)/2014シーズン

■ 登録対象選手

Jリーグ提携国の国籍を有する選手

■ 提携国枠導入後の外国籍選手最大登録数および試合エントリー数(出場数)について

外国籍選手	条件付きの外国籍選手			登録数	試合エントリー数
	U20+C、アマ※1	アジア枠※2	提携国枠(仮)		
3人以内	2人以内	1人以内	2人以内	最大5人	1チーム3人以内。 ただし「アジア枠」または「提携国枠」の選手については、1人に限り追加できる。(最大4人)

※1 アマチュア選手または20歳未満のプロC選手 ※2 AFC加盟国の国籍を有する選手

[参考① 2013年11月19日現在のJリーグ提携国(リーグ)]

タイ(タイプレミアリーグ)、ベトナム(ベトナム国プロリーグ)、ミャンマー(ミャンマーナショナルリーグ)、カンボジア(カンボジアリーグ)、シンガポール(シンガポールリーグ) ※現在交渉中のリーグあり

[参考② AFC加盟国選手の選手登録枠(アジア枠)]

Jリーグのゲームレベルの向上、アジア地域における新たな事業的可能性の開拓、AFC加盟国との国際交流、貢献の推進を目的として、2009シーズンより導入。

「コカ・コーラ Jリーグ 月間MVP」 10月の受賞選手決定

各月のリーグ戦(J1、J2)において最も活躍した選手を表彰する「コカ・コーラ Jリーグ 月間MVP」の10月度の受賞選手が決定した。J1は横浜F・マリノスのGK榎本哲也、J2がジェフユナイテッド千葉のFWケンベス。受賞したJ1選手には30万円、J2選手には20万円の賞金を授与。選考は当該月のリーグ戦における活躍を対象に、サッカー専門メディアとJリーグからなる選考委員会で行われる。

フィリピンでハイライト番組、ベトナムでJ2を放送

フィリピン最大手の民放 ABS-CBN Broadcasting Corporation(地上波)で、11月15日よりJ1リーグ戦のハイライト番組「J League Highlights Show 2013」の放送が始まった。J1各節の開催後に、全9試合の得点シーンを中心としたハイライトで振り返る30分の番組となる。

また、ベトナムのテレビ局VTC Digital Television Stationでは、スカパーJSAT株式会社の協力のもと、今シーズンのJ2リーグ戦のうち、第41節のFC岐阜 vs コンサドーレ札幌、第42節の札幌 vs ギラヴァンツ北九州の2試合を生放送した。J2の試合のベトナムにおける放送は初めて。

JFA公認C級コーチ養成講習会 海外での初開催に協力

公益財団法人日本サッカー協会(JFA)および公益社団法人日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)は11月11～18日、アジア各国のリーグでプレーする日本人選手を対象に「JFA公認C級コーチ養成講習会」をシンガポールで開催した。本講習会の海外開催は初めて。東南アジアなどでプレーする日本人選手の多くが、現役引退後は現地で指導者を志すケースが増えており、ライセンス取得の希望に応えた。今回は、JFAおよびJリーグが共にパートナーシップ協定を結ぶシンガポールで開催し、同国サッカー協会推薦の同国人指導者も受講者として招待した。

2013 Jリーグアウォーズ
12月10日(火) 横浜アリーナで開催
BSスカパー! で完全生放送(17:30～22:00(予定))

J1とJ2、関西勢にドラマ

共同通信社 © 山室 義高 (やまむろ よしたか)



PROFILE

1975年12月15日生まれ。神奈川県横浜市出身。横浜翠嵐高校→早稲田大学卒。2000年に共同通信社へ入り、日韓、ドイツ、南アフリカでFIFAワールドカップを取材。2年間のプロ野球担当を経て、今シーズンから再びサッカー担当。

一瞬、このバスはどこへ向かうのかと考えてしまう。車内は若い女性でごった返している。ユニバーサルスタジオ近くのJR桜島駅から、真新しいクラブハウスのある舞洲方面へ。行き先は間違いなくセレッソ大阪のはずだが…。練習時間に合わせ、普段はガラガラのバスがにわかにはいきで満ちる。

今シーズン、8年ぶりに関西でJリーグを取材した。8年前の2005年は忘れ難い。優勝争いは最終節まで大混戦。ガンバ大阪が川崎フロンターレを4-2で下して悲願のリーグ戦初制覇を成し遂げた一方で、首位だったセレッソはFC東京に終了間際の同点ゴールを奪われ、悔し涙をのんだ。ヴィッセル神戸はJ2降格の憂き目に遭い、京都サンガF.C.はJ2でぶっちぎって昇格を勝ち取った。悲喜こもごものドラマがあった。

星霜を経て13年、関西のJ1はセレッソだけとなり、あのガンバはJ2…。時の流れを感じつつ現場に戻り、最初に驚いたのはセレッソの変貌ぶりだった。まず目を引いたのが、柿谷曜一朗、山口 螢、扇原貴宏、

杉本健勇、南野拓実ら育成組織出身の有能な選手が多いこと。しかも「イケメン」(?)ぞろいで女性ファンが引きも切らない。柿谷がEAFF東アジアカップ2013 決勝大会で日本代表にデビューし、優勝に貢献する3ゴールを奪うとさらに人気は過熱した。練習後、時に1時間以上もサインや写真撮影に応じる彼らのサービス精神には頭が下がる。山口は「代表でない時に来てくれた人もいるだろうから」と、ファンの心情を察しながら色紙にペンを走らせた。

ピッチでは、森島寛晃、香川真司らがつけた背番号8を継承した柿谷がゴールを量産。「育ててもらったセレッソで活躍するのは、自分の使命」とクラブへの深い愛着を示し、憧れの番号を背負う自らのユニフォーム姿に「かっこええ」とほれ込むエースが、昨シーズンは14位だったチームを上位に押し上げる。サポーター席にも女性の姿が目立ち、ホームの入場者数は過去最多を記録しそうだ。岡野雅夫 代表取締役社長も「新規の顧客を獲得しつつあるのでは」と話す。

人気、実力とも勢いを感じさせる1年だった。

入場者数でいうと、ガンバもJ2で抜群の集客力を示した。特にアウェイは軒並み平均比2~3倍の入場者数だった。日本代表戦が開催されない地方で、遠藤保仁や今野泰幸のプレーが間近で見られる魅力は、やはり大きい。ただ、遠藤は「僕らの試合はお客さんがいっぱい来てくれたが、他の試合は全然入っていないことも多い。日本サッカー全体を盛り上げるためには、もっとJ2でも人が入るようにならないといけないと感じた」と冷静だった。J1とは違う舞台で戦い、今までとは異なる視点でサッカーを見つめられたのかもしれない。

序盤こそもたついたが、ガンバは1年でのJ1昇格とJ2優勝を果たした。楽勝だったわけではない。加地 亮は「J2の選手のサッカーに懸けるハングリーさは見習わないと。J1でも十分やれる実力の選手がたくさんいた」と実感を込め、今野も「捨て身で来る相手は、やはり難しかった」と振り返る。各チームから標的にされるタフな環境で期待通りの結果を得るのは、はた目より困難だったはずだ。

紆余曲折を経た新スタジアムの建設も再来年には完成する見通しが立った。尽力した野呂輝久 代表取締役社長は「新しいスタジアムでJ1優勝したい」と繰り返す。そうならば、さぞ痛快だろう。クラブの夢は膨らむ。

ヴィッセルはガンバと激しく首位を争い、サンガは昨シーズンと同じ3位でJ1昇格プレーオフに回った。今年こそという雪辱の思いは相当強い。4年ぶりに関西4チームがJ1にそろえるのか。やはりJ1で大阪ダービー、関西ダービーがないのは寂しい。

多くのファンも同じ思いだろう。来シーズンはダービーマッチを待ちわびた人々に対し、ライバルクラブ同士が協力して、互いの対戦時に合同のファンサービスを企画してみるのも面白いのでは。プロ野球では巨人、ヤクルト、DeNAの首都圏球団が実施しているが、取材の経験上、Jリーグのサポーターの方が近隣クラブへの対抗意識は圧倒的に強い。関西勢が知恵を出し合って他の試合にはない特典やプレミア感を演出し、甲子園球場での阪神 vs 巨人にも負けられないイベントにできないだろうか。

8年前に劣らず、関西勢にとってドラマチックなシーズンが間もなく終わる。混み合うバスに揺られながら、さらに関西のファンが熱くなるようなシーズンの到来を願っている。



柿谷(右)、丸橋(左)ら、育成組織出身の選手が活躍したC大阪。チームも好成績で、ホームゲームの入場者も増えた

